
【夢幻の大陸詩】 Blue Bird & Black Bloom? ~ 勇の章

水城杏楠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【夢幻の大陸詩】 Blue Bird & Black Bloom? ～勇の章

【Nコード】

N7023X

【作者名】

水城杏楠

【あらすじ】

身寄りのないユティアは少女でありながら少年の奴隷として安く売られてしまった。そのまま三年もの月日が過ぎたある日、ついに少女と知られて身の危険を感じた彼女を救ったのは、野性的な青年カデイルと、女神のように美しい容姿の青年シオンだった。彼らはユティアに衝撃の真実を告げるのだが、すぐには信じられず……。奴隷生活から解放されたユティアは、次第に幸せとはなにかを理解していくのだが、それに絶対量はなく、相対的にしか計れないもの

だった。
――舞台は戦乱続く古代、滅びゆく国とその再生の物語、
第一部。

序章 牢獄の華 1

たいていの恐怖には、もう慣れているつもりだった。

何も見えない闇夜も、身体に注がれる冷たい雨も、何日も続く空
腹感も。

盗みをして追いかけられたり、差別の眼差しを向けられたり。

どんなことにも、一人でじっと耐えてきたつもりだった。

（けれど、こういうのは嫌だ）

金持ちの男たちが何人も、じろじろとこちらを見ていた。誰もが
じやらじやらと、見せびらかすように宝石を身に着けていた。あの
指輪ひとつ、売ればきつと一ヶ月は生き延びられるのに。

木でできた窮屈な箱の中。けれどそれが、いまの世界のすべて。

ここに閉じ込められてもう何日たったのか、数えるのをやめた。

逃げたい……けれど、もう疲れてしまって、そんな気力もない。

こういう人たちに捕まってしまったときから、もう諦めるしかなか
ったのだから。

男たちの視線から目を逸らすのが精一杯で。

最後の、悪あがき。

もう、にらみつけてやるだけの力も絞り出せなくて。

「これはいくらだ？」

背の低い太った五十代の男が、あごで示したのが自分なのだと、
薄暗い中でもわかった。ほかの多くの子供たちもいつせいにびくり
と肩を震わせたが、指されたのが自分でないことに気づいて安堵の
雰囲気が出る。

（どうせだれも、助けないし）

我が身だけで精一杯。

「こんなひよろひよろした男の子でいいんですかい？」

帽子を深く被った痩せ型の男が、薄く笑いながら木の格子に手を
かけた。これは、子供たちを現実から隔離する境界線だ。この中に

しか、自分たちの未来は入っていない。

いや、この中にすら、未来なんてない。

そんなものは、この世界のどこにもない。

「……」

静かに息を吐いた。

本当は女の子だと言いたいけれど、働き手にならない女の子は売れないからだめらしい。身なりがよければ娼婦にでもするんだがなとぼやくのを何度も聞いた。娼婦の意味はよくわからなかったけれど。

「使い捨てにはちょうどいいだろう」

髪の毛のほとんどない男の後頭部に、後ろの壁にある灯籠の薄い光がゆらゆらと映る。

格子を開けられて、出ると命じられた。逆らうことはできず、立ち上がったらふらりと立ちくらみが襲ってきた。段差につまずいて転んでも、誰一人として手を差し伸べなかった。

頭上から呆れたような声だけが降り注ぐ。

「なんだ、食べてないのか」

「はあ、すみませんねえ。こちらとしてもあまり余裕がないもんですから」

ここでは自分で盗まなくても食べ物が出てくることは、唯一ありがたいことだった。たとえそれが、誰かの残飯だったとしても、一口で終わりそうなほどの量だとしても、毎日一回、自分で探さなくとも食べ物に勝手にやってくる。

「まあいい。名前はあるのか」

「おい、名前はなんだ？」

帽子の男は、そんなことも知らずに何日も食べ物を与え続けていた。こうして売り払うためだけに。

「……ユ、ティア」

乾いた唇で、なんとか名前を口に出した。素直に答えなければ、また鞭で打たれるだけだ。食べ物もらえる代償に、自由がなくな

った。

だのに、こちらのほうがましだと思えるのは、生きたかったからだ。

みつともなくても、本能がそう訴える。

自由が、この空腹を満たすことは永遠にない。

「女みたいな名前だな。歳は」

「じゅ、十……さい……」

本当は十二歳だったが、そう言えと命令されていた。歳が若い方が高く売れる。背も低く、痩せすぎているからそのくらいには見えるという自覚はある。

「まあまあ、お安くしますんで」

そう言って帽子の男が提示した金額は、安い宝石も買えないような値段。そんな価値しかない。

太った客はその金額に満足し、すぐさま支払った。いとも簡単に。

（あれがわたしの、価値）

十歳の男の子。

偽りだらけの経歴で、売られていく。

自由のない檻から、また自由のない檻へ。

場所だけが変わっても、この身を置く状況は変わらなかった。

幌のない安っぽい馬車にユティアは乗せられた。どこに向かうのかもわからなかったが、格子から出てきた外では、久しぶりに見る太陽が頭上高く、輝いていた。

薄暗い場所にいたユティアには、眩しすぎる光だった。

序章 牢獄の華 2

「今、なんて……？」

かすれた声。

それでも無意識のように、唇が動いていた。

何を言われたのかわからなくて、ただ。

「……私は、降伏すべきだと思うのだ。カディ」

左手に持っていた剣を落としそうになった。ぎりぎりのところで、踏みとどまった。しゅつと一振りしたその金属が、いつもより軽やかにすら感じた。

「クレイ なに馬鹿なこと言ってるんだ？」

連日の戦で心が弱くなっているのか、それとも狂い始めているのか、その両方なのか……。

どちらにしろ、カディには正気の言葉ではないように聞こえた。

「このように、我がエリシャの大地を穢してまで守るものがあるのか？」

その問いかけに、カディは返す言葉をすぐに見つけられず口を噤んだ。

文字通り最後の砦となっているこの大離宮の屋上からは、東西南北の景色を望むことができる。クレイの灰色の双眸が、壊れかけた街壁の向こうにある遠くの山を見つめた。

美しく紅葉していた山々の景観は、わずか三日で焼け野原に変わった。炎を放たれて、それを消火する余裕も逃げる体力も残っていなかった民たちが、大勢焼死したという。

国力は弱まり、物資は民にまで届かない。

日々悪化していく戦況に、兵も氣力を失いつつあるのを感じていた。

「カストゥールは大国だ。……我がエリシャ王国の民を受け入れてくれるのなら、それで民が生き延びられるのなら、私はそのほうが

いいと思うのだ」

大地を削る、嵐のような強い風。結わずに流した彼の長い髪が、その表情を隠した。

「生きてさえいれば、いつかきつと、希望や夢をまた、得られるのではないか……？ 民が餓えていくのを……苦しんでいるのを、もう見ていられぬ……」

嗚咽を堪えるように、クレイは声を絞り出す。

覚悟がまだ、揺れている。

「でもあんたは王だ」

「わかつている」

「本当にその意味が……っ」

わかつているのかと最後まで言葉を続けられなかった。

カストウールは、すでにエリシャの王族をすべて処刑した。先王の兄弟とその家族……女子供にいたるまで、王位を継ぐ可能性のある濃い血脈は、すべて排除した。

彼が降伏すると決めたら、たしかに戦は終わるかもしれない。

けれど、そのときクレイは王ではなくなるのだ。

生きてさえいれば カディはその言葉がクレイにこそ必要なものなのだと思っている。

「わかつているよ……」

顔を上げた彼の表情が、すべてを受け入れようとしていることを示していた。

「三年前……私は王位を継ぐべきではなかったな」

それが戦争を長引かせた。

彼を担ぎ出した重臣たちも、今ではそれをうすうす感じているのだが、口には出せないでいる。

「なら、エヴァン王国のように従属すればよかったのか？ なんの抵抗もしないで奴隷みたいに……っ」

かつて同盟を結び友好的であった国の名前に、クレイはカディにもわずかにしか感じ取れないほどの悲壮を見せた。

絶望ではなく、ただ純粹な切なさだったのかもしれない。

どちらの選択肢が正しかったのかわかんて、今でも誰も、わからないのに……。

「そんなことは」

カディはその言葉を聞いていなかった。クレイも途中で言辞を飲み込んだ。

まったく気配を感じさせずに、二人の目の前に五人もの男が現れたのだ。こんなことはもう珍しくなくなっていて、カディも驚かなかった。

（魔道王国が……っ）

純粹な力だけでは対抗できない。

それがカストウル王国。

「ルーフェイザ王っ！ 討ち」

血にまみれたその剣を握った男は、鼓舞の言葉を最後まで続けることができなかった。カディの剣が一閃し、同時に三人が声も上げる間もなく絶命していた。

そして次の瞬間には、手首を返した彼の剣技の前に、残りの二人も床に倒れた。

「カ、ディ……」

座り込んだ彼の双眸は、光を失い、彷徨うように護衛騎士の姿を探している。

カディはクレイの左手を握り締めた。震えてはいなかったが、その額が力なくカディの肩に落ちてくる。

血を嫌い、争いを嫌う、この戦乱を生き抜くためにはあまりにも弱く、優しい王。

だが、カディももう、手加減をして敵を逃がすわけにはいかなかった。彼を生かすためには誰かを殺すしかないのだ。

「俺は認めない！ あんたがいるから俺はここにいるんだっ」

カディに生きることを教えたクレイが、逃げようとしている。それが許せなかった。そしてなにより、クレイの決断が客観的に間違

いではないかもしれないと気づいてしまった自分自身が許せなかった。

「あんたは殺させない」

「　　ありが、とう」

弱い光で、クレイはカディを見上げた。

平和な世の中ならきつと、稀代の英君と讃えられただろう、叡智を秘めたまっすぐな瞳だった。

そこに一抹の希望が落ちてきたような気がして、カディは眉根を寄せた。

危うい……なにか。

壊れかけたものを必死でつかむかのように。

潤いのないひび割れた大地に、ひっそりと生えた一本の苗。

「それならば、その力で私の義妹を、守ってほしい」

「義妹？」

こんなときに何を言い出すのかとカディは瞠目した。クレイはエリシャ王族最後の生き残りだ。従兄弟にいたるまでもう誰も、残ってはいないというのに。

「私はもう、お前に守ってもらわなくて……いいよ。戦を、早期終結できるのは、私しかないからね」

先ほどよりも柔らかな、だが強い口調に、彼が必死で覚悟を決めようとしているのだとカディも悟った。

彼が王として決意したのなら、それにはもう、反駁できない。

カディがクレイを守って落ち延びるのは、今の段階ならば容易だろう。だが、あとに残された民や臣を、クレイはきつと省みずに生きていくことはできない。そしてカディは、クレイを罪びととして生き永らえさせることを選べない。

「お前はもう、覚えていないかもしれないが……私には義妹がいる」

「何を言って……」

「もう、四年になるな。義母上と義妹は父上のご采配で、エリシャ

を去った。すでに長い戦乱になると予期しておられたのだろう」

戯言には、聞こえない。

遠い記憶を、呼び起こす。

まだ幼かった二人が、よく城を抜け出して向かった先は……第三離宮。

「義母上は身分のない方であつたから、離宮に住んでいたな。私はよく、義妹に会いに行った。お前も何度か一緒に来てくれたよ」

「そういえば……」

そんなこともあつたかもしれない。

もうあまり覚えていなかった。すぐに戦況が激化して離宮には行けなくなり、日々に追われて思い出に浸る余裕がなくなったから。

「カストゥールはその子を探している、きっと……。だからどうか私の代わりに殺させないで、ほしい」

最後の我が俤。

個人としての望みなど、何一つ叶わなかった王の、ひとつの灯火。「名前は？」

カディはもう、それすら忘れてしまっていた。

「義妹、の、名前は……」

クレイに顔を近づけて聞いたささやくような声を、カディは何度も反芻して今度こそ忘れないよう胸に刻み込んだ。

一章 夢との境界線 1

あつとユティアが思ったときは遅かった。

その両手に乗るはずだった高そうな絵柄の陶磁器の皿は、一瞬のうちに足元へ落下した。

派手な音。

「……っつ」

素足に破片が刺さっても、悲鳴を上げることはいできない。

広い食卓では、そんな様子を誰も何もなかったことのように、食事が続いていた。奇妙に豪華で、わざとらしいほどに異なる時間が流れる。

取りにくいように皿を渡してきた主人は、こちらを振り返ることもなく客人たちと大声で品なく笑っていた。

ユティアは残飯とわずかな血にまみれた破片を拾おうとかがんだとき、ようやく男が顔をこちらに向けてきた。

「すみません、教養のない子で。昨日買ったばかりなんですよ」

「いえいえ、まだお若いようですけれど、おいくつで」

「十五ですよ」

「ああ、なるほど」

客人たちが、気味悪いほど優しい瞳を一齐に向けてきた。ユティアはいそいで破片を集めて立ち上がる。破片で傷ついた足がずきずきと痛んだ。

（……だからわざと、怪我させたんだ）

今日、このあと逃げさせないために。

「じゃあまたあとで」

主人の一番そばにいた男が、ねつとりと絡みつくような視線でユティアを見上げた。それだけでせつかく集めた破片を取り落としそうになったが、なんとかこらえて逃げるように帷をくぐる。

「なにやってるんだいっ」

廊下の角を曲がったとたん、問答無用で長身の女の容赦ない平手が飛んだ。傷だらけの足で立っていられずに、ユティアは床に倒れこんで、手に持っていた皿の破片が再び飛び散った。

「ったく、三年も騙してくれたかと思ったら、やっぱり迷惑ばかりだねこの子は」

「……………」

卑しいものに対する視線で一瞥され、露出の高いひらひらとした服を大げさに翻しながら、女はユティアの腕をつかんで無理やり立たせた。

「……………痛……………」

女の握力が強かったわけではない。

服に隠れて見えないが、そこにはぶたれて出来た無数の傷が、完治せずに残っていた。

「誰かつ？　ここを片付けときな」

甲高いその一声で、ユティアよりも幼い少年がどこからともなく現れて、散らかったものを片付け始めた。その様子を見向きもしないで、女はユティアを引きずるようにして歩いた。

何度も転びそうになり、そのたびに女の罵声が飛んだ。

廊下のつきあたりの部屋に連れてこられ、ユティアの背中を押して部屋に入れる。その空間の大半を占める大きな寝台に倒れこんだ。

「いいかい？　そこで待つておくんだよ」

「え……………」

女は部屋を出て行った。

「……………ま、待つ……………」

その部屋には珍しく布製の帷ではなく、分厚い木の扉がついていた。

女はユティアを振り返ることなく部屋を出た。外から扉に錠が下るされる音がした。

（逃げ、なくちゃ……………）

奴隷の少年が実は少女だとわかったとたん、この遊里に売り飛ば

された。この部屋にいればどうなるかなんて、少し考えればわかることだ。もう娼婦の意味もわからないほど幼子ではなかった。

だが、体力を失っているユティアが少々押したくらいでは、その扉は当然びくともしない。格子の窓に錠はないが、ここは二階だ。飛び越えても地面はないし、たとえあつたとしても、庭にも多くの男たちが警備という監視のもとにうろついているのを知っている。

ユティアは扉に寄りかかるようにして額をつけた。

立っているだけで、先ほどの傷が痛んで血がにじんできた。

何故こんな目に…… 何度も考えてきた言葉が再びよぎると、涙まで止まらなくなる。

「……おね、がい」

もう、かすれた声しか出てこない。

扉を必死で叩いたが、外に聞こえるほどの音を出すことすらできなかった。

（誰か）

（……あけ、て）

縋るように、扉に体重を預けるようにして両手を置いた。

体力も失っていて、空腹も手伝って、気が遠くなりそうになる。

そつと双眸を閉じかけた、そのときだった。

視界のすみで、なにかが淡い光を放ったような気がして、はっと目を見開いた。

（……扉、が）

どこからの発光かわからないが、ただ輝いていた。

小さな命の、灯火のように。

少しだけ扉から離れると、かたりと小さな音が扉の外で聞こえた。不思議に思っただけで押ししてみると、何の抵抗もなく扉は開いた。かけられたはずの錠が床に落ちている。

（……誰、かいる、の？）

おそろおそろ扉の外をのぞいてみるが、そこに人影はない。まさか風などで金属の錠が落ちるはずもないだろう。

(……また、だ)

ユティアのまわりでは、ときおりこんなことが起こっていた。寒くて凍えそうだった夜、突然近くにあった椅子が燃え出して怒られたし、のどが渴いて外で倒れたら突然雨が降ってきてびしょぬれになってやつぱり怒られた。

(……今回は錠が壊れた、のかな。でも何で?)

だが、その疑問はすぐに封印した。逃げるならこれほどの好機はない。

ユティアはもう一度、頭だけを廊下に出して見回してみる。

「何をしているっ!」

廊下の奥の角から、男の罵声が飛んだ。はっとユティアが身を縮めたときには、男はユティアに近づいて腕をつかんでいた。足元に落ちていた錠を一瞥する。

「お前が開けたのか?」

「ち、違……」

先ほどの食事の席にいた三十代の男だった。下品な笑いばかりを浮かべる商人風の男たちばかりの中に、彼だけが剣を帯びて旅人のようなすつきりとした格好をしていたから、ユティアも覚えていた。「ふん、何も知らなくても血筋は本物ということか」

男はユティアを寝台に突き飛ばした。

(なに? ちすじ、って……)

だがそんなことを尋ねることはできなかった。

男が腰の剣をあつさりと抜いたのだ。

鞘を離れたその切っ先は……ユティアのほうを、向いていた。

何が起こっているのか、これから何が起こるのか、ユティアにはまるでわからなかった。この状況……何かがおかしい。剣。鋭利な金属。首筋に近づいてくる。

「悪いね。あんたの命で大金が手に入る。仲間と組んでちゃ分け前も減るしな」

「え」

「それほど価値があるようには見えねえけど」
はっとユティアはやつと気づいた。

この男は、自分を殺そうとしているのだと。
善意なんて、ユティアのまわりにはどこにもない。

その切っ先が目の前にあって、ユティアは逃げることもできなかつた。ただ、その剣と男を交互に見ることしか。

「でもまあ、その前に」

男はあっさりと切っ先を床に落とす。

太い指が、ユティアのあごをつかんで上を向かせた。

「少しくらい遊んでも悪くないな。ここはそういう場所だろ」

「……っや」

剣を苦もなく扱う男の力は強くて、ユティアは顔を背けることもできなかつた。

乱暴に寝台に倒されて、その上に男がのしかかってくる。

肩を抑えられて身動きすらできない。簡単に服を破かれてしまう。
もともと着まわしたぼろ布のような服だった。

恐怖で、声までも固まったように何も出てこなかつた。

（い、いや……だ……）

たとえ大声をあげたとしても、誰かに助けてもらえるなんて思っていない。そんな優しいところじゃない。

だから逃げないと。

自分で、なんとかしないと。

（こ、わい……）

急に身体が熱くなった。

内から湧き上がる、なにか。

熱。

「なんだっ？」

男が思わず両手を離してあどすさる。

手が、全身が、光っているように感じた。実際に目で見たものなのか、わからないけれど。

自分の身体ではないように思えるほど、奇妙な光景だった。

息が、できない。

苦しくて、胸を押さえた。

少し顔を上げると、男がこちらを見ていた。険しい表情だった。目が合うと、何かを思い出したかのように剣を握りなおし、大げさなくらいに振り上げた。

「ちっ、恨んでくれるなよっ！」

ユティアの身体は、反射的に縮こまる。何ももう、考えられなかった。生きるとか、自由とか、何も思い浮かばなくて心が空になっていた。

ただ、苦しい。

本能だけがそれを訴えていた。

「ばあっか！ 恨むに決まってんだろーがっ」

どこからか、別の声が聞こえた。

誰かの手に肩を強いくらいに握られたかと思うと、胸元に抱きしめられた。同じタイミングで、耳元にキーンと高く、金属同士が打ち合う音を聞いた。

「頼む！」

あまり強くない力で突き飛ばされた。後ろに倒れるかと思ったら、冷たい手が肩を支えた。

「はいはい」

ずいぶんと落ち着いた、静かな声だった。

高くもなく、低くもなく、どこか遠くから漏れる楽器の音色のようだった。

近くにあった大きな白い布がずっと視界を舞い、裸に近かったユティアの全身が覆われた。

「大丈夫ですよ。大きく深呼吸して」

耳元で囁かれる、美声。

後ろで支えられ、背中をゆっくりとさすってくれた。

熱いものがそれだけで急速に身体の中に消えていく。自分でもわ

けがわからない。

顔を上げると、ユティアを殺そうとした男は、たくさん血を流して床に倒れていた。もう生きていないのだろうとどこかで思った。空腹で死んでいった子供たちはたくさん見てきた。彼らよりもすぐ死ねる分、楽でいいのかもしれない。ぼんやりとした頭で、考えたのはそれだけだった。

「こいつを売ったやつもたたき切つてやるっ！」

「そんなことしても意味がないよ。それより早くこの場を離れたほうがいい」

「わかつてるけど！」

二人の男たちは、同時にユティアのほうを見た。

剣を持った男の、深い青の双眸が、特に強くまっすぐにユティアを射抜く。

（……夢、かな。それとも、わたし、も、もう死んでしまってるのかな）

だってこんな、綺麗なものを、この町で見たことがなかった。

死んだら別の世界に行ってしまうと母が言っていた。ここがその別の世界なのかもしれない、

だったらここで、母を捜そう。

（ああ、よかった……）

新しい世界は、きつと美しいものたちで出来ている。
ほっとしたら全身から力が抜けた。

「おいっ！」

「気を失ってしまったみたいだね」

二人のそんな声を遠くで聞いた。

一章 夢との境界線 2

やっと、見つけた。

クレイとの約束を、見つけた。

エリシャから遠く離れた地で、やっと。

「ユ、ティ、ア」

初めてその名前を、口に乘せたら少しだけ安堵できた。

昔遊んだという記憶も、おぼろげながら思い出してきていた。ずいぶん美化されてしまったかもしれないが、カディールの持つ記憶の中で、美化できるものといえばその一年間しかなかった。

カディールは、その額に手を伸ばしかけて、止める。

硬くまぶたを閉じるその顔は、ずいぶんと痩せこけていて傷や痣だらけだった。顔だけではない。晒していた素肌は荒れていて、治っていない傷がいくつもあつた。どれほどの仕打ちを受けてきたのか想像もできないほどだ。

『その力で私の義妹を、守ってほしい』

クレイの、最後の夢。

（ああ、わかつてる）

その約束があるから、カディールはクレイの後を追わずにまだ生きていける。

「ひどいね……少女にこんなことを」

「なんとかならないのか、シオン」

ユティアの細すぎる身体を支えているシオンは、少し息を吐いてユティアの伸ばしたまま手入れもしていない前髪を優しく梳いた。極度の栄養不足からか、この少女はあまりにも小柄に感じる。

「魔道では無理だよ。早く神殿に行ったほうがいい」

カディールはちらりと扉のほうに視線を向けた。

騒ぎを聞きつけたのか、廊下から何人かの足音が聞こえている。隠す気もない、荒々しい気配。

「どうすんだ、ここ」

ユティアはこの商品ということになっている。カディールたちが連れ去ったことを知れば、意地になって追いかけてくるかもしれない。

「そうだね」

シオンはユティアをカディールに渡すと、ゆっくりと右手を掲げた。中指の銀の指輪が瞬時に長杖に変化する。

「施錠せよ」

簡潔な言葉で、扉は手も触れていないのにぱたんと閉じた。

次に寝台に敷かれていた大きな布を引き抜き、人の大きさに丸めて男のそばに置く。杖から炎があがり、あっというまに男とその布を包み込んでいった。

「これで時間かせぎができる」

それで十分だ。足取りはすぐに消せる。

煙がすぐに充満してきた。この部屋は二階だったが、カディールはユティアを抱きかかえたまま、躊躇することなく窓から飛び降り、シオンもそれに続いた。

一章 夢との境界線 3

『貴女はお姫様よ』

大きなお屋敷のご主人様。

たくさんの使用人、綺麗なドレス、大きな庭のこぼれる花、どれもみんな、お姫様のもの。

小さな可愛いご主人様。

『じゃあおかあさまもおひめさまね』

『ふふ、ありがとう』

優しい香り。

そこにもうひとり。

『おにいさま、いらっしやい』

『やあ、元気になっていたかい？』

綺麗なおにいさまが、ときおりお姫様を訪ねてくる。とびきりの笑顔。

『今日はね、私のお友達を連れてきたよ。お前も友達になっておくれ』

『ええ、もちろん。おにいさまのおともだちはわたしのおともだちよ』

なにひとつ疑うことを知らないお姫様は、純真に答える。

おともだちは、深い紺碧のひとみをお姫様に向けた。

『彼の名前はね』

なまえ、は……。

一章 夢との境界線 4

はつと目を開けたらそこは、現実だった。

（やっぱり、夢……）

それは、母が作ってくれたおとぎの世界。

大きな屋敷に住む、お姫様の物語。それを自分と重ねて空想するのが、あのころは楽しかった。

実際には母とあばら家に住んで、藁で籠を編んで売る生活だったけれど。

お姫様には、穏やかで妹思いの兄と、乱暴だけど優しい友達がいる。

庭には池があつて三人で魚を捕つて遊び、少し遠くに出かけて使用人に怒られ、同じ寝台で昼寝をして同じ夢を見た。

空想の中ではどんなことも楽しかった。

（……でも久しぶりだなあ、これを思い出すの）

母がいなくなつて五年。二年は路上で生活し、そのあとの三年は奴隷扱い。いつのまにか、こんな空想の世界は忘れていた。なぜ今頃になつて思い出したのだろう。

「お目覚めになりましたか」

誰かがいるとは思わず、ユティアはびくりと肩を震わせた。

窓から西日が差し込んでいて、少し薄暗い。何故こんな時間に自分が寝てしまつていたのかわからなかった。

（……お、怒られる、また　　）

あわてて起き上がったら、いつもと何かが違うことにようやく気づいた。

「え？ な、なんで」

ユティアはやわらかい寝台に寝かされていた。いつもなら硬い床で眠り、翌日は疲れが取れないどころか、身体中の痛みを抱えていなければならなかったのに。

（そ、そんなことより……仕事）

夕方だというのに寝ていたと広まれば、またどんなことをされるかわからない。

「まだ起き上がらないで。足、痛いでしょう」

その優しい声がまさか自分にかけられてるとは思わなかったユティアは、この部屋にほかに誰かがいるのだろうと思いつながら、よろよろと立ち上がった。

「……っ」

痛くても声を上げないことに、慣れていた。

そういえば足を怪我した。でもいつ。すぐには思い出せない。

とにかくあわてていて、ユティアは服の裾を踏んでしまった。バランスを崩して前に倒れるしかなかった身体を、誰かの手が支えた。

（あつ）

反射的に身を引いた。

（ぶたれる……っ）

その場に両膝をついて頭を低くする。これももう、条件反射。

けれど、その震える肩に注がれたのは、鞭の嵐や罵声ではなく、優しく触れる手のひらだった。

「すみません。何のご説明もしてなくて。顔を上げてください」
すぐ近くで聞こえる穏やかな声が、自分に向けられているのだと
ようやく思ったユティアはおそろおそろ顔をあげた。

（まだ、空想の夢……続いていたのかな）

だが、ユティアの目の前にある顔は空想の粹を超えた、まるで女神だった。長い睫毛の奥の優美な翠の瞳は、自分よりもほど女性らしい光を放っていた。ゆったりとした長衣と長くまっすぐ伸びる銀色の髪の毛が、風を受けて柔らかに揺れた。

こんな綺麗な顔を想像すらしたことはなくて、ぱかんと見上げてしまう。すべての造形が完璧に整えられた芸術作品のような容姿なのだから。

けれど、なぜだろう、空想の女神であるはずなのに、その声音はあきらかに男性のもので不思議だった。

よく見ると、自分の着ている服もおかしい。いつものぼろ布ではなく、露出がほとんどない長いスカートの、女性の服だった。裾を踏めるほど長い服なんて、いままで一度も着せてもらったこともないのに。

「……夢の中なのに、こんなもの。……それともわたし、生きてないの？」

視界は少し暗いものの、まわりも変にはつきりとしていることに気づいた。

どれが夢でどれが現実なのか……。

わからなくなる。

「ここは現実ですよ。ちゃんと生きてます」

「で、でも」

「シオン、買ってきたぞーっ」

こんな現実があるはずないと言いかけたとき、女神の青年のうしろにもう一人の男が現れた。

「ああ、ありがとう」

女神は何かを受け取り、それをユティアに手渡す。

「秋だから、いろいろな種類があつてよかった。どれが好きですか？」

大きな籠。

その中にはすぐに食べられる果物がどっさりと入っていた。中には見たこともないものもある。

「……っ？」

食べていいのかと尋ねる余裕もなく、差し出されたそれを見て急に喉の渴きを思い出し、ユティアはむさぼるようにその籠にあった果物のひとつを食べてしまった。

が、二つ目に手を伸ばそうとしてから、はっと気づいて顔を上げる。手に持っていた食べかけのそれを、落としたことにも気づかず

に。

（な、殴られる……また）

知らずに身を硬くする。謝罪の言葉などここでは意味がなかった。

ただ、耐えるしかないのだ。

震える身を縮こませ、ユティアはそう覚悟して俯いた。

だが、いつまで待っても彼らは殴るところか怒鳴ることもなかった。

「貴女の方ですよ。でもあとでちゃんとした食事もしましょう」

「え？」

女神は、慈愛の微笑を返した。これもまた、初めてのことだった。
（殴られ、なかった……？）

以前、もう捨てるしかない余りものの果物を勝手に食べただけで
散々殴られたあげくに三日は食事をもらえなかったことがある。

やっぱり夢かもしれないと、ユティアはまた混乱する。けれど、
夢だというのに、空腹だった。

「おい、ぼけつとしてるけど大丈夫か？ まだ寝ぼけてるだけか？」

女神の後ろにいた男が、ユティアに声をかけた。

「寝ぼけ、て、る？」

夢の中だというのに、奇妙な質問だ。

「どうやらまだ、夢うつつのようで」

男がユティアに近づいてきて、じつと顔を近づけてきた。

彼の双眸は、今までユティアが見たどんなものよりも美しい青の
色をしていたけれど、その物言いはかなり乱暴だった。

「やっぱり、現実じゃない……」

こんな綺麗なものは、この世界に存在しない。

「は？ なんでそうなるっ」

あきれたように男がつぶやく。

「ちゃんと説明さしあげなかった私たちも悪いんだよ、カディー
ル」

「じゃあお前がしろ、シオン」

青年は窓のほうに寄りかかり、外をちらりと眺めながらもこちらを一瞥する。銀髪の女神が、そっとユティアを抱き上げて、寝台に座らせてくれた。

「ここは神殿といえます。私たちのような旅人が休憩する場所を、安く提供してくれるんですよ」

天神クリスナードに祈りを捧げる場所。

それが神殿だ。たいていどの国どの町にもあるらしいというのは、ユティアも知っていた。

神使いと呼ばれる人々が働いていて、天神と万物に感謝しながら質素な生活をしているのだという。どの国にも属さない代わりに、どの国の内政にも干渉しない。

「だから、とりあえずここにいれば少し安全です。ほんの一時ですが」

安全。

殴られたりしないという意味だろうか。

「私の名前は、シオンといえます。あちらの粗雑な男はカディール」
「粗雑はよけいだ、粗雑は！」

カディールと呼ばれた青年が、たしかに粗雑な物言いと反論した。透き通った紺碧の瞳の彼は、大きな剣を背中に背負った、いかにも剣使いという簡素ないでたちで、長い赤茶色の髪の毛を後ろで束ねている。ぶっきらぼうだが、恐ろしいという印象はなかった。

「私たちはずっと、貴女を探していました。奴隷商人に連れ去られたと聞いて、その場所を探していたところ、運良く貴女を見つけたんですよ」

シオンはカディールを無視して話を続けた。カディールは会話に入る気がないのか、気にする様子もなく相変わらず窓の外を眺めていた。

「ここは、エヴァン王国のラタの町といえます。知っていますか」
ラタの町、これは知っている。けれど国の名前まで聞いたこともなかったから、曖昧にうなずいた。

「貴女はお母様と、七年前にこの町に来たのですよね」

「……どうして、それ、を」

あのころのことは、ほとんど覚えていない。

もう、母の名前もわからない。

五年前に死んでしまった。そのときの状況はもう、覚えていなかった。けれど、母がいなくなって、あばら家を見知らぬ人々に追いつ出されて、一人になった。

「十二年前。貴女がまだ三歳だったとき、カストゥール王国が、貴女とお母様の住んでいた国であるエリシヤ王国と戦を始めました」
「ぽかんとただ、シオンを見つめ返しただけだった。実感がない……というよりも、なぜそんな話をユティアにするのかわからなかった。」

（戦……）

母が、戦はよくないことなのだと言っていたことを、突然思い出した。そのときも実感がなく、幼いユティアは何のことか分からずに何度も聞き返して、そのたびに母は嫌な顔もしないで答えてくれていた。

今まで、生きていくことに必死で、母の言葉を思い出す余裕はなかった。ただ、母の顔だけはいつも、寝る前に思い出すようにしていた。

忘れないように、刻みなおすために。

「貴女とお母様は今から七年前にエリシヤ王国を出て、かつて同盟国であったこのエヴァン王国に逃げ込みました。知り合いの方に後見していただく話だったのが、カストゥール王国を恐れて、反故にされてしまったのだと、最近やっと聞いたのですが……」

どうしてこんなに自分たちのことに詳しいのだろうか。それともすべて、何かの目的のためにしている嘘なのだろうか。

シオンは寝台に座るユティアの隣に膝をついたまま、なお話を続けた。

「十年近く続いた戦は、もう終わりました。エリシヤは負けたので

す。……けれど、王妹殿下が生きていることをカストゥール王国は知っています。先ほどの男もその刺客」

「さきほど、の？」

「覚えていませんか？ 遊里で……」

遊里という言葉を書いたとたん、ユティアの脳裏には鮮明にその映像がよみがえってきた。

「あ」

呼吸を忘れる。身体が震える。

あのときの恐怖。

全身を抑えられ、身動きも取れなくて。

息が苦しくなったとき、急に楽になったことだけは覚えている。

（たす、けて、くれた……の？）

この二人が。

そんなはずはないと思い直す。だって誰も、他人を助けたりしない。

「すみません、思い出させてしまって。……大丈夫です。ここならもう安全ですよ」

シオンはもう一度、同じ言葉を紡いだ。ユティアの震える指に、そつと自分の指を絡めて開かせた。

いつのまにか爪が食い込みそうなほど、手を握り締めていた。

優しすぎる、刻。

その体温。

ここは、夢ではなく現実なのだと、ユティアはやつと実感した。この女神に、触れることができる……。

「そ、それで……わたし、なにを……すればいいの？」

「え？」

彼は心底驚いたように聞き返した。

無償の愛を、ユティアは知らない。

（見返りが、必要だ）

奴隷という待遇でしか、対価を返せない。安い宝石や小麦や果物

なんかと交換されてしまいかもしれない。

それが自分の知る限りの、自分の価値だった。

「わたし、は……あまり役に、立たないけど……」

「何言ってるんだ？」

大きな窓のそばに立っていた赤毛の青年が、機嫌を損ねたような声を出した。それを制した銀髪の青年が、ゆつくりと口を開いた。

「私たちは貴女様をお守りするためにずっと探していたのですよ」

何か急に、話が飛躍したような気がした。不思議そうに首をかしげる。

「よく、わからないけど……」

「だからお前の言い方はわかりにくいってんだよ、シオン」

カディールが窓際からようやく離れて、ユティアの隣に腰を下ろした。その勢いで寝台が沈み、ユティアの軽い身体が揺れる。

「あんな、ユティア」

紺碧の双眸がまっすぐにユティアを見てきた。

「あんたがその、生き残りの王妹殿下なんだぞ。それわかってるのか？ 正式な名前は、リディアーナ」ユティア「エリシャ。俺はあんなの兄に頼まれて探してたんだ」

「……？」

何度か、まばたきした。

声が、出なかった。

返す言葉も、浮かばなかった。

二人の顔を交互に見つめ返すだけだった。

「こう見えても彼、王直属の最年少の護衛騎士だったそうですよ」シオンはユティアを、姫君と呼んだ。

（……それって空想の中だけじゃ）

こんな冗談を今まで聞いたことはなかった。

二章 長い間 1

たとえば、細い枝からひっそりと落ちていく花の一片だとか。
風で揺れる水面に映る山並みが消える瞬間だとか。

そんな夢だ。

不確定で曖昧で、けれどどこまでも美しいとしか形容できない非現実。

けれど、ユティアは願う。どうか悪夢を見させてください、と。
現実のほうがほんの少しでも幸せなら、目が覚めたときほっとする。良すぎる夢を見てしまったら、もうそこからきつと抜け出せない。

* * *

「……やつぱり来たな。かなりの数だ」
「さすが、早いね」

寝静まった夜にそんな声が近くで聞こえて、ユティアははっと目が覚めた。いろいろ考えすぎて寝つきが悪かったせいもあるが、どこにいても深い眠りにつくことのできない生活に慣れすぎていて、ちょっとした物音でもすぐに気づくようになっていた。

だが、いつもの固い地面でなく、何枚もの布を重ねた寝台のおかげで、前のように身体が痛くなかった。花の蜜のような香りも部屋に広がっていて、ほとんど眠っていないのに疲れはないことにも驚いた。

暗闇の中、ぼんやりと窓際に立つカディールとシオンの背中が、月明かりで浮かび上がっている。

「一日くらい、ゆっくり寝かせてさしあげたかったけれど」

「しょうがねえな。ここにいるのはもうばれてるんだろ」

カディールがユティアのほうに近づいてくるのがわかって、ユティアは反射的に飛び起きた。もらったばかりの腕輪がくると半回転した。まだ、誰かがそばにいることに安心できずに警戒心ばかりが先に立ってしまったのだ。

「……おっと、起きてたのか。ならさっさと行くぞ」

「え？」

「聞いてたんだろ。あんたの追っ手が来てんだよ」

カディールに乱暴に手をひかれて、ユティアは立ち上がった。まだ足に少し違和感はあるものの、神殿にいた神使たちの治癒という力によって、痛みは不思議なほど消えていた。

すでにカディールはすべての荷物を手に持っていて、窓枠を簡単に飛び越えると、ユティアの腰をつかんで抱きかかえ、外に出した。部屋の中ではシオンがすくっと立っていた。右手をかざすと、中指の指輪が長い杖に変化した。

それに驚いている間もなく、風に揺れる布の帷の向こうで、何人もの男たちが抜き身の剣を構えてシオンを取り囲んでいくのが見えた。ユティアには彼らが見えているのに、彼らにはこちらが見えていないようだった。

「ちっ」

カディールの舌打ちを聞いて、ユティアは視線を部屋の中から外に戻す。いくつかの影がこちらに向かってきているのを見つけて、カディールが左手で背中中の剣を抜いたところだった。男たちは、剣や弓を持っていた。

「離れるなよ！」

声が出なくて、ユティアはただ何度も頷く。

彼は左手で剣を持ち、右でユティアをかばいながら、彼らを次々となぎ倒していく。

血の、匂いと、痛みによる叫び声。

すぐ近くにあった。

（……ひとが、しんでいく）

この恐怖だけは、何回体験しても慣れることはなかった。

貧民街での二年間と、屋敷で奴隷にされた三年間、周りではよくひとが死んでいた。

馬に轢かれたり、どうでもいいことで争い殺しあったり、飢餓だったり、した。

目を逸らして見ないようにしていても、金属の打ち合う音や弓が風を切る音が聞こえる。

（　　耳も、閉じてしまいたい）

カディールによつて、十人近い男たちすべてが地面に臥せって動かなくなつて、剣を収める音だけが響いた。

「終わったぞ」

それを聞いても安堵することはできなかった。

カディールはそれを氣遣う余裕もなくユティアの腰をつかんで、今度は馬の背に乗せた。カディールもすぐにその後ろに飛び乗って走り出した。

彼の腕に支えられ、馬の背にあつても安定しているが、暗闇の中では何も見えなかった。

「シ、シオン、さんは……」

「あいつは敵を眠らせて、あの部屋に閉じ込めるんだと。たしかに予想以上の大人数だからな、全員をいちいち相手にしてられねーし。準備してたから問題ないはずだ」

呆れたような口調。

（眠らせて、閉じ込める？）

そんなことができるのは魔道使いだ。貧民街にも、そういう力を持った子供たちがいた。彼らはその力でほかの子供たちよりもうまく生きていたと思う。

「本当ならシオンのほうがあんたの守りには向いてるんだけどな」
カディールはぼつりとユティアのわからないことを呟いた。聞き

返したかったけれど、暗い夜にかなりの速さで走る馬に振り落とされそう、もう何も言えなかった。

カディールは強いくらいの力を右手にこめてユティアを抱きしめ、左手のみで器用に手綱を操っていた。

ユティアも無意識のうちにカディールの腕を強く握る。

どんなに慣れたと思っても、夜の暗闇は恐ろしい。

寒くないのに身体が震えてしまう。

人売りとは違って、彼らは本気でユティアを殺そうとしているというとも思い出さくない。

（空想の中の、おにいさまのともだち……）

蒼い瞳。乱暴だったけれど、優しくった。いつも兄と笑っていた。そんな世界がまさか現実だったなんて、思いもよらなかった。

（クレイ……カディ……）

言われてみればそんな名前だった気がする。

（じゃああの空想は全部、ほんとうだったの？ 『おにいさま』がいて、大きなお屋敷に住んでいたの？ 母さま……）

何も教えてくれなかった。

けれど、母もこの空想の話を楽しそうにしてくれた。それは、空想ではなく、記憶の中の風景だったのだろうか。

ユティアは少し怖くなって、カディールから離れるように身じろぎした。けれど、カディールは変わらず強い力でユティアを支えている。痛くはなかった。むしろ心強さを覚えてしまうほどだった。

ユティアの手首には少し大きすぎる腕輪が、馬にあわせて上下に動いていた。カディールに兄のものだからと渡された。魔道力の込められたものだからきつと守ってくれるとシオンに言われた。

たしかに母に教えられた空想の中の兄は、この綺麗な腕輪をしていた。これを見たら思い出した。

（現実には、おにいさま……）

馬は小さな町を離れて、小川を越えたところで止まった。その先は木が覆い茂る丘になっていた。

カディールは自分が降りたあと、ユティアを降ろしてくれた。

「こちらです、カディール、リディアーナ様」

ぼんやりと空を見上げていたユティアに、木々しかなかったところから、突然シオンの声が聞こえた。けれど、カディールは驚かなかった。むしろシオンの声に振り向いたユティアのほうに目を向けていたのだが、ユティアはそれには気づかなかった。

「行くぞ」

カディールは右手でユティアの手を、左手で馬の手綱をひいて、丘を少し登っていった。

木の陰にシオンの姿がすぐに見えた。

彼を置いて馬を走らせたはずなのという疑問は、魔道使いなのだからということに納得することにした。ユティアには想像できないような力がきつと、あるのだろう。

カディールとユティアがシオンの背のほうに立ったあと、シオンは持っていた長い杖を地面にトンとつけた。ユティアよりも背の高い先端に、いくつもの銀色の宝玉が光っていた。

「闇に同化せよ」

地面に強く差し込んだわけでもないのに、その杖はシオンが手を離しても倒れなかった。不思議そうにその様子を見つめるユティアの視線に気づいたシオンが、振り返って笑顔を返した。

「もう大丈夫ですよ」

その言葉は、不思議と安らいだ気分させた。

ほっと気が抜けると、押し殺していた恐怖と、身体の震えが止まらなくあふれ出す。

「……ほ、ほんとに？」

膝から力が抜けて倒れそうなところを、カディールが支えた。ゆっくりと地面に腰を下ろした。

「ユティア」

「こ、こんなことがずっと……続いてくの？ わたし、ずっと、狙われるの？」

殴られる恐怖よりもずっと、いまのほうが恐ろしい。

「そのために俺たちが来たんだろーが」

「ほんとうにわたしが……そ、その……おひめさま、なの？ なにかの間違い、とかじゃなくて……」

空想が現実だったなんて、それこそ夢に見たことだ。

いつそ目が覚めずに、あの煌めくような夢の中で生きていきたいとさえ思ったほど。

「俺はあんただから来たんだ」

カデイルの強い右腕が、ユティアの頭を軽く包み込む。

言葉はそっけなかったが、体温は暖かった。

それでも不安だった。

「でも、いつまで？ こうして、逃げたり、戦ったり……」
ひとがしんでいたり、する。

「俺にもわかんねーよ。でも俺がいる限り、絶対守ってやる。殺させねえ」

「根拠のない自信に聞こえますけれど、でも私も貴女にそう誓いたいと思っています」

「でもっ」

顔を上げた。

暗闇だったが、目が慣れたのかカデイルの顔がよく見えた。

「あ」

ユティアの瞳に映ったのは、頬の傷だった。深くはないようです。で血は固まっていたが、よく見ると左右の腕にも多くの切り傷があった。

「ああ、気にすんな。別にたいしたことじゃ」

「ででもっ、カデイル、さんの、傷、こんなにたくさんで」
見ているだけでも、痛い。

（わたしを捨てて、逃げればいいのに）
そうしたら、彼は傷つかなかった。

誰もが自分を守ることだけで精一杯だった世界しか、ユティアは

知らない。自分が怪我してまで助けしてくれることが現実とは思えなかった。

「カディールは体力だけがとりえですから、姫君が気になさることはないんですよ」

「誰が体力だけだ！」

傷などないかのように、カディールは腕を自由に動かしていた。

ぽかんと二人を見上げていると、カディールがユティアの頭を軽くたたいた。

「あんたさ、こんな傷くらいでびびってたらどうすんだよ、この先。俺けっこう怪我多いし」

「それは自慢することではないでしょう。……リディアーナ様、たしかにカディールは考えなしに動くところがあって怪我ばかりですが、そうとう丈夫ですししぶといですし諦めも悪いですし」

「それは褒めてんのか？」

二人の会話があまり緊張感なく穏やかだったので、ユティアも少し息をついた。深刻なことはなさそうだった。

「カディールの役目は貴女を守ることですから、遠慮なく楯にしているですよ」

「……なんかお前に言われると違う気がするぞ」

二人は言い争いながらも楽しそうだった。シオンの穏やかな様子は、理想の兄に少し似ているかもしれない。

「じゃあ、シオンさんは」

カディールは空想の中にいるけれど、どれだけ思い出そうとしてもシオンの姿はない。

「ああ、彼がエリシャでクレイ様の護衛騎士になる前からの、いわゆる幼馴染です。クレイ様と面識はありませんから、姫君はご存知ないと思いますが」

二人の雰囲気はまるで違うが、だからこそ息も合っているのかもしれない。

「……ていうかさー」

カディールがユティアのほうに視線を戻して覗き込む。

「え？」

「カディールさんはやめろ、カディールさんは！ 虫唾が走る！」

「君は姫君に失礼すぎるよ」

本気で言っているわけではないのだろう、シオンが笑っていた。

「……じゃあ？」

「カディールでいいから。前もそう呼んでた」

「う、うん」

反論しても怒られるような気がして、ユティアは勢いで頷いていた。

（……前、も）

そんな時が本当にあったのだろうか。

「夜のうちはここにひとまず身を隠せます。まだ日の出まで時間がありますから、リディアーナ様はお休みください。いろいろあつてお疲れでしょう」

「あ、あの。シオン、さん」

「シオンでけっこうですよ」

「……わたしも、できれば……ユティアのまま、が、いい」

二人がそうなら、自分もまた、もとのままの名前がいい。

敬称をつけられて、長い名前で呼ばれても、姫であると信じられるわけではない。そんな扱いに慣れていないから、どうしていいのかわからなかった。

「わかりました。ユティア」

その返事にほっとする。虚像はだって、似合わないから。

二章 長い間 2

眠りやすくなる薬草を混ぜたミルクを飲ませて、ユティアはやっと眠りに落ちた。

「よかった。よく眠っている」

シオンがユティアの横顔を見つめて、とりあえず息をついた。

「お前が魔道力で眠らせればいいだろ」

「それでは起きたとき余計に疲れてしまうよ」

カディールは魔道のことなどさっぱりわからないから、そうなのかと端的に返した。

一人でゆっくり寝かせてやりたかったが、あまり遠くに離れてしまつと闇に隠した魔道の威力が弱くなつてしまつとシオンに言われ、ユティアはカディールのすぐとなりになり彼の外套を敷いて横になっていた。

「やつぱり、私が魔道で隠したものが見えていたみたいだね」

「だからお前も遊里で強い力にすぐ気づいたんだろ？」

カディールの言葉に、シオンは神妙に頷いた。魔道というのはくせがあるらしいが、そんな力のないカディールにはわからず、シオンの言葉を信じるしかなかった。先ほどシオンは姿を消していて、自分には見えていなかったのだが、ユティアは反応していた。それは潜在能力がシオンよりもユティアのほうが優れているという証なのだろうか。

「また昨日みたいに暴走することはないのか？」

「どうだろうね……。まだユティア自身、このお力にあまり気づいていらつしやらないから、ないとは言切れないね。けれど、王の腕輪はたしかに魔道抑止の力があるから」

「そう何度も起こらねえってことか」

十歳を超えてから魔道力をうまく操る練習をするのは難しいと聞いたことがある。何事も若いときのほうが吸収力がいいのはたしか

だ。

「五年もずっと……ひとりでいたんだしな。どんな生活だったんだろうな……」

「後悔しているの？」

もっと早く気づいてあげられたら、と。

けれどそれは、無理だったとカディールもわかっている。

十年、戦は続いた。

先王の戦死ですぐに降伏していれば、これほど長引かなかったかもしれない。けれど、王の嫡男クレイが、すぐに王位を継いで戦は続いた。それほどまでに、カストゥールに屈服するのを民は許さなかった。

「やっぱり俺がクレイを連れて逃げればよかったのか？ そしたら兄妹が再会できたかもしれねーよな」

「いまさら言ってもどうしようもないよ、カディール。それにクレイ様はそんなことをお望みではなく……民と最後まで戦うと、そう決意されたのでしょうか？」

リディアーナ姫の兄、ルーフェイザ「クレイ」エリシャ。

義妹を守ってほしいと言い残し、民が生き残るために全面降伏を選択した、若き王。

「そう、だな」

カディールはユティアの黒髪をそつとなぜた。薬の影響か、彼女は軽く身じろぎしたものの、目を覚まさなかった。無造作に伸ばされたままのそれも、神殿で洗いシオンに梳かされてずいぶん綺麗になっている。

「ずいぶん緊張してたなこいつ」

それに血が苦手だった。そういうところは兄とよく似ているのかもしれない。カディールもけっして得意ではないが、剣使いである以上、仕方がないことだ。生きていくための手段なのだから。

「まだ、私たちのことも疑っているご様子だね」

「そりゃそうだろ」

カディール自身、クレイに言われるまで忘れていた、夢のように遠く幸福だった日々。

奴隷として殴られるような生活をしていた少女が突然、人々の頂点に立つ王族なのだと言われても信用されないとは思う。

「でも、クレイと約束したからな。俺はなにがなんでもユティアを守ってやる」

「珍しいね。君が女性に対してそんなふうと言うなんて」

からかうその口調に、カディールは半ば本気で怒りの眼差しを向けた。

「女じゃない。主君だ！」

「そのわりには尊大な態度だけれどね」

そんな態度をとられても、シオンは余裕の表情を崩さずにくすくすと笑う。

王直属の護衛騎士　　今となつては何の役にも立たない称号だが、これがカディールのすべてでもあった。

その王がユティアを守れというのなら、自分の命をかけて達成させるしかない。

（次は、間違わない）

王を守れなかった後悔は昔はあったけれど、捨てることにした。

クレイが望んだことだ。もう、王を守る必要はないのだと、彼が命じた。そして、カディールには、生き延びさせる目的を忘れずに残した。

「でもこれからどうするんだ？　俺たちだってもう、行くあてなんかないだろ」

第一の目的である、リディアーナ姫の保護は達成した。

陥落した王宮と国を捨てて、三年以上が過ぎている。リディアーナ姫同様、カディールにも追っ手は仕向けられているはずだったし、シオンという魔道使いの協力者がいることも知られているだろう。

「しばらくは転々とするしかないかもしれない」

「珍しく無計画だな」

「うん……できればクリス聖王国に行きたかったけれど難しいようだから、もう少し情報がほしいところだね」

いつまでもエヴァン王国にはいられない。

かつてはエリシャ王国と同盟国であったこの国も、カストゥール王国との戦が激化していく中で、その関係を維持できなくなっていた。今ではエヴァン王国は、カストゥール王国に従属することで戦を回避した。

「クリスはだめなのか」

天神クリスナードと神殿という文化はそこから生まれ、いまでは東大陸中の国に広まっている。

大国と呼ばれるほどの力はまだないが、確実に成長をしており、カストゥールも安易には戦をしかけられない相手のようだ。

けれど、逆にこちらを保護するような余裕はないかもしれない。

さらに、クリス聖王国の正式な後見を得れば、カストゥールとはまます対立する立場に置かれることになる。

「クリスにはいつか行けると思う。けれど長く滞在できない」

そうなるとこの放浪生活がいつまでも続くということだ。それはユティアにとって好ましくないとカディールも思う。

「それに、エリシャ領にも立ち寄らないとならないね……」

さらにと言うが、それがどれほど難しいか、想像もできない。

エリシャ領。

かつて王国と呼ばれていたその地域は今、カストゥール王国の一部になっている。けれどいまだに、エリシャの民はそこをカストゥールとは呼ばないのだという。それが精一杯の抵抗のしるし。

「なんでエリシャに行くんだ」

ユティアをあの地へ連れていきたくないという思いがどこにある。

（いや、ちがう……）

カディール自身が、もう行きたくないと思っている。

思い出は美化されたままで、現実を突きつけられたくないのかも

しない。

「アセアラ王国に行きたいからだよ」

「はあ？」

本気かと疑いたくなっただ、こういうときにシオンは冗談を言わない。

南東の海を制する、別名を海賊王国。

面積こそ取るに足らない小さな国だが、それによってアセアラを軽んじる国はどこにもない。

陸路はすべて山脈に囲まれているという天然城壁を備え、絶対に沈まない船と絶対に迷わない航海技術を持っていると言われている。どことも正式な国交がないため、詳しいことは誰も知らない。

見知らぬ船が彼らの海域を通れば容赦なく攻撃されるという危険極まりない国はあるが、そんな場所だからこそ他国の影響を受けていない。カストウルですら、容易に手出しできずに沈黙を保っている。

エリシヤは地理的にアセアラ王国の西にあり、海流に乗ればその海域に入り込むことができるのだが……。

「……お前の考えそうなところではあるよな」

「君に思考を読まれるようでは、私もまだまだだね」

「てめーなあっ」

そう軽口を叩いてはいるが、カディールはアセアラへの足がかりのためにエリシヤを選ぶのは正しいと思った。

（……だったらエリシヤであいつに会わないと）

三章 時を止めるもの、戻すもの 1

まずはエヴァン王国最南にある王都サルナードに向かうとシオンは言ったが、その前にユティアたちは比較的大きな街カイゼに立ち寄った。ラタよりはかなり大きく、ラタを含むこのあたりの領主の館があると説明してくれた。

「まだ窓の外見てんのか」

下の食堂に果物を取りに行っていたカディールが部屋に戻ってきてもなお、窓から町並みを眺めているユティアの背中を見つけて呆れた口調になる。

「うん……だって、上から、こうして見るのはじめてだから」
すべてが珍しかった。

ここの神殿はかなり大きく、三階建てだ。祈りのために訪れる民も後を絶たないばかりか、ユティアたちのように神殿の休憩部屋を借りている旅人も多く見かけた。敷地内には食堂や大衆浴場まで用意されていて、久しぶりの大きな風呂にシオンは喜んでいた。

三階建ての建物というのはこのあたりでも稀で、すべてのほかの建物がユティアの足元よりも下にあるようだった。そんな光景は、まるで空を飛んでいるかと錯覚させる。

「ひとがすごく、小さい……」

道端で話をしている中年の女、物売りの少年、行きかう馬。遠くにいる人々までここからでもよく確認できた。

カディールはそんなことには興味がないようで、持ってきた果物をテーブルの上にどざりと置いた。丸いオレンジが床に落ちてユティアのほうに転がっていく。

「食べるよ。野宿じゃあまり良いもん食えなかったからな」

「え……そんなこと、ないよ？」

ラタの町を出て十日以上野宿で、保存できるようなものばかりだから、種類は豊富ではなかった。だが、ユティアには今までに見た

こともないような食べ物ばかりで、毎日空腹になるときがなかった。
「あんな食いもんで満足すんな」

「う、うん……」

ユティアには野宿の食事でも十分だったが、カディールの言葉にただ素直に頷いた。

（でも、このひとたちについてきて、よかったんだよね。もう、そう決めたんだし）

本当は、少しだけまだ、怖い。

でもそれは、殴られるときの純粋な恐怖ではなく、広がっていく新しい世界への好奇心と未知への恐れ。

ユティアは転がってきたオレンジを拾った。

丸くて、重たい。

腐っていない果物を手にすることはほとんどなかった。木から盗んでひどく怒られて、叩かれた記憶ばかりが残っている。

「カディ……」

「はんは？」

別の果物をかじりながら、カディールは何だと応えた。

そんなときでも、彼は背中の剣をはずさない。

「あの、ありがとう……いろいろ」

「は？」

「最初の日のあともずっと、たくさんのひとがわたしを追ってきていたのに、カディは危険なのに戦ってるでしょ」

自分のためにしか動かなかった人々しか、ユティアは知らない。

誰かのために命をかけるなんて、物語でしかありえないと思っていた。

「何言ってるんだ。これが俺の仕事だ」

カディールは手に持っていた果物を置いた。

「あんたが気にすることはねーんだ。俺はクレイと約束したんだから」

「わたしの……兄って、どんなひと？」

兄　この言葉を口にするには慣れていない。

戦があつて、彼はもう死んだ。

カディールは他人事のように淡々とそう言つたけれど、双眸だけが泣いているようで、本当は尋ねてはいけないのだとユティアも思う。

けれど、知りたい。

母は物語のように、お姫様とその兄と、大切な友達の話をしてくれた。どうして本当のことだと教えてくれなかったのだろうか。会えないとわかつていたからあえて告げなかったのか、彼を置いてきたことへの罪悪感からか。

「あいつは　王には、向いてなかった」

カディールは珍しく無表情だった。

「……？」

「民を思いやり、他人が傷つくことを嫌がり、俺たち騎士の身を案じる……」

「それがいけないこと、なの？」

「戦乱で、王の役目は自分が生き残ることだ。その上で、兵を奮起させ、国のために戦わせることだ」

カディールの口調が少し、強くなった。

「あんたも王族で、狙われてるってことはその命に価値があるってことだ。だからこそ、生き延びることが仕事で義務だ。俺たちにたとえ、何があつてもな。俺の命はあんたのもんなんだから」

「……そんなの」

「あんたができないと諦めるなら、俺が守る意味はない」
難しい。

生きていくことだけで精一杯だったユティアには、想像できない世界だった。けれど、こう言ってくれるカディールの期待には、応えたいと純粹に思った。

神妙な顔をしてうつむいてしまったユティアを見て、カディールは何気ない様子で果物を口にする。

「ま、今どうこうしろってことじゃねーし」

カディールなりに気を使っているのか、少し語気を和らげた。

「それより、シオンはまだ帰ってこねーのか」

今朝この部屋を借りてから、シオンは用事があるといつて半日近く戻ってきていなかった。何かあったのではないかと不安になるユティアの表情とは別に、カディールは慣れているのか、特に気にしている様子もなかった。彼が何をしているのか知っているのだろう。（そうだよ、シオンは魔道使いなんだし）

自分にも母にもそんな力があつたと聞いて驚愕だったが、だからといってその力を使いたいとは思わなかった。

ユティアはオレンジを剥きながら、また外を眺めた。

ここは神殿の裏側だから、ここで見ていてもシオンが帰ってきたかどうかは確認できない。大きな神殿と外壁の間に木々が植えられていて、いくつかの小さな小屋が建てられている。大通りから離れた細い道は人通りが何もなく、静かだった。

（あ、ひとがでてきた）

神殿の裏口があるのか、そこから一つの影が姿を見せた。きよろきよろとあたりを見回し、一つの小屋に入ったかと思っただけにでてきた。

ユティアは窓から大きく身を乗り出して、その行方を目で追いかける。

何か、ひっかかるものがあつた。

「おい！」

カディールが後ろからユティアの両肩をつかむ。

「なーにやってんだ。危ねーだろ」

「ご……ごめんなさい」

いったん視線をカディールに向けたが、すぐに外に戻した。何がそんなに気になるのかと、カディールも見守った。

「あいつがどうかしたのか？」

「うん、どこかで」

ゆっくりと記憶をたどっていく。あのうしろ姿には見覚えがあるけれど、ユティアの知り合いは多くない。

影は自分のうしろを確認するためか、少し振り返った。その顔がここからでもよく見えた。

「あっ！」

すぐにユティアは走り出していた。部屋を飛び出す。

「おい、待てっ」

背中でカデイルの声を聞いたが、ユティアはあの影を見失いたくなかった。

「危ねーつつてんだろ」

「ひゃっ」

階段を駆け下りようとしたところで一段を踏み外し、落ちるかという刹那にひよいとカデイルがユティアの身体を軽々と抱えた。そのまま一階まで降りたあと下ろしてくれたばかりか、ユティアの知らない裏口のほうを案内してくれた。

「あ、ありがとう」

「あんななあ、狙われてるって言うてんのに自覚ねえだろ」

「……あ」

言われたばかりだった。王族としての役目。

「ごめんなさい……」

「まあいいや。それより追いかけるんだろ。行くぞっ」

カデイルは先に走り出して、ユティアは慌ててそれを追いかけた。

小屋のそばにはその影はもうなかったが、木の陰で石壁をよじ登って敷地の外に出ようとしている少年をすぐに見つけた。

「レクト！」

「えっ？ ……うわあ〜っ」

ユティアに名前を呼ばれて振り返ったとき、バランスを崩して少年は背中から落ちた。幸い高さはユティアの目線より少し高いくらいだった。

「いってえ」

「だ、大丈夫っ？」

少年は近づいてきたユティアを見上げた。

「お、おまえ、泣き虫ユティアか？」

「う……うん……あの」

昔のあだ名を言われるのは恥ずかしくて、ユティアは曖昧な顔をして頷いた。

ラタの町の貧民街で生活していたが、何年か前に奴隷商人に捕まって売られてしまった、顔なじみの少年だった。

彼は背中をさすりながら起き上がり、昔とはまるで違ってすつきりとした格好をしているユティアを上から下まで何度も眺めた。

三章 時を止めるもの、戻すもの 2

ユティアは正門からレクトと外に出て、誰もいない裏道のほうに回った。

「へえ、あのひとに買われたのかあ」

レクトに実は隣国の姫なのだと説明しても、自分でも嘘のような話に聞こえるのでやめておいた。そうでなくても、他人に自分の素性を明かすのはカディールたちに禁止されていて、通常はカディールと兄妹ということになっている。レクトには誤解されたが、ユティアも訂正する気はなかった。

「でも贅沢させてもらってんじゃん」

レクトは、ユティアが最後に覚えている彼の姿とたいして変わらないばろぼろの格好を今でもしている。けれど、ユティアのそれは簡素だが真新しい少女の服。そんな格好で昔の知り合いに会うのは少しおかしい気がした。

「レクトは？」

「ああ、おれはしばらく奴隷やらされてたけど、逃げた」

「え……そうなんだ」

彼は逃げることでできたのだ。捕らえられても絶望することなく。

「じゃあ、いまは？」

カディールたちと過ごしていると、そんな世界もあったことを忘れてしまいたくなる。けれどきつと、ここにも飢餓に泣いている子供たちはいる。

「あー……うん、いつしよにいる仲間とき、食べ物分け合ってるよ。毎日市場にいるんだ」

レクトは少し顔をゆがめた。旅人として神殿の部屋に泊まっているユティアには、変わり映えのない毎日を話したくないのかもしれない。

それでも、一人ではないというのは、少しだけ救われる。未来の

ない、生活をしていても。

「あ、そーだ。おまえも逃げて来いよ。ここにいるやつらみんないやつだし、もうぶたれたりしねーからさ」

「……あのひととぶつたりは、しないよ」

言葉はきつかったり、ぶつきらぼうだったりするけれど、基本的にカディールは優しい。そして、シオンは女性のように穏やかだ。カディールは気をきかせたのか、二人とは離れているが、どこかで視線を感じていた。あまり聞かれたくない内容だった。

「そんなの最初だけかもしれないだろ」

「奴隷とか、そんな……扱じゃない、から」

「じゃあ、愛人ってこと？」

「っ！」

ひどい言い方だ。けれど、そう思われてもしかたない状況だったから、ユティアは反論すらできずに下を向いた。それを肯定と受け取ったのか、レクトはさらに言葉を続けた。

「おまえ昔は、奴隷なんてぜったいやだっつってたじゃん。それなのにそんな高いものもらったからって使われていいのかよ」

レクトの視線は、右手首にある銀の腕輪に向いていた。純銀で細かい鷹の絵が描かれているそれは、見るからに高級品だ。

「これは、そんなんじゃないよ」

伸ばされたレクトの手から避けるようにして右肩をかばうと、レクトは少し驚いたようだった。だが、反対の腕を強くつかまれた。

「前みたいにあ、それ売ったらけっこう金になるじゃん。おれ、この町でもそういうの売れるところ知ってるからさ」

「や、やめて……っ」

振りほどこうとしてもがいたとき、ふいにその腕が解放されて、よろめいたところを別の腕に支えられた。

「そこまでにしとけよ。度が過ぎると俺も、手加減しねえからな」カディールがレクトの手をユティアから無理矢理引き剥がして、軽い力で押した。それだけでも子供と大人の体格差があり、レクト

は後ろに倒れてしまう。

「……な、なんだよ。邪魔すんのかっ」
「そりゃこっちが言いたい」

レクトは反論しかけたが、カディールに見下ろされて口をつぐんだ。カディールの背中隠れたユティアに少し視線を投げたが、諦めたように立ち上がり走ってどこかへ行ってしまった。

「ったく、たちが悪いな」

「……」

その言葉に、ユティアはうつむいた。

カディールはそんなユティアの様子を気にするでもなく、軽く促して神殿に入っていく。

薄汚れた服を纏った者など一人もいない、清潔な世界。

その中を抜けて、階段を上っていく。

「そうそう、シオンも戻ってきてるぞ。あんたに」

カディールは、三階までの階段を上ったところで振り返った。けれど、ユティアは二階からそれを見上げたまま、追いかけて足を動かすことができなかった。

（　　）　　たちが、悪い。それは、わたしも同じだ）

ユティアはほとんどを一人で生きてきたが、それでもレクトは、交流のあった数少ない知り合いの一人だ。仲間、と呼べないこともない。

「どうした？」

彼にはきつとわからない。

当たり前のような、この生活に慣れているのだから。

（レクトとわたしは、同じ　　）

いつかきつと、それをカディールが知ったら、レクトのように軽蔑されて突き放されるのだろうか。卑しいもののように、いらぬもののように。

「おい、ユティア！」

カディールはいつのまにかユティアの目の前にいた。

「どーしたんだよ？」

「　　な、なんでもな……」

言いかけたところでカディールに額をこつんと叩かれた。

「ばかだな。何でもないなら、何でもない顔できるようになってから言えよ。俺でもわかるぞ、あんたの嘘」

はつとして顔を上げると、彼の苦笑がすぐ近くにあった。

彼の紺碧の双眸は、嘘がない。

穢れていないからだ。

肩に触れられて、思わずユティアは一步下がった。

触れたところから、この醜い感情が溢れ出て彼に知られてしまう気がした。

「ユティア？」

「わたし、は……」

食べ物がありませんで、空腹を我慢できなくて、貴族や金持ちの商人から盗んだこともある。

（　　知られたく、ない）

飢餓で倒れていく子供たちを見てきた。その恐怖から、そうやってなんとか逃げて生き延びてきた。

悪いことだとわかつていた。けれど、空腹で何日も泣いた。

そうやって死んでいく子供たちを見て、食べ物の分け前が増えるかもしれないとどこかで囁く自分の醜い声を聞いていた。

（……やっぱり、お姫様になんかなれないよ。ここはわたしが生きていい場所じゃ、ない）

物語にある姫君はそんな悪いことはしない。

豪華な服を着て、美しく笑っている。誰にでも平等の慈愛を降り注ぐ。

理想の貴婦人。

「昔の知り合いに会って、いろいろ思い出しちゃっただけ、だから」
何も言いたくなくて、ユティアはそう取り繕った。これは、嘘ではなかったから。

「仲良かったのか？ そうは見えねえけど」

ユティアは勢いよく首を横に振った。

利害だけでつながっていた。

お互い、生きるために。ただ、それだけのために。

「俺たちというより、そっちに戻りたいのか？」

「……戻りたく、ない」

ついこの前まで感じていたすべての辛さは、ここにはないのだから。

「じゃあ、何が不満なんだ？」

「……え？」

この気持ちは、不満というのだろうか。

（なんの心配もなく、食べていけるのに）

何かに脅えたり、苦しんだり……そんなことから解放されたのに。

「あまりユティアをいじめないでくれるかな」

はつと顔を上げると、いつのまにかシオンが部屋から出てきて、

ユティアたちを見下ろしていた。

「全部見てたくせによく言う」

カディールはユティアをつかんだ手を離した。

「君も女性に優しくする術を学んだほうがいいよ」

「だって、はつきりしねーからさ。悩みとかあるんだったらさっさと

言えばいいだろ」

「……だから君は粗暴だと言っただよ、カディール」

シオンの呆れた口調と、カディールの無然とした表情。

この数日で、これらのやりとりが彼らの日常なのだと気づいてしまった。最後にカディールはそっぽを向いてしまうことが多いのだが、今回もやはりそうだった。

三章 時を止めるもの、戻すもの 3

「もう、いいですか？」

「はい。カンペキです」

少女の高い声とほぼ同時に、カディールとシオンが部屋の中に入ってきた。

ユティアは気恥ずかしくて、その少女の背中に隠れてしまいたかった。けれど、カディールと違ってユティアと同じ背格好だから、完全に隠れることができるはずもなかった。

「よくお似合いです。サイズも合っていますか？」

「ええ、それはもう！」

彼女はアジアと名乗った。大人びているように見えたが、ユティアと同じ年だと聞いてかなり驚いた。自分が子供すぎるのだろうか。

「あ、あの……ええっと」

「なに恥ずかしがってんだよ。けっこう似合ってるじゃんか」

相変わらずアジアの後ろにいるユティアの手を、カディールが引いた。それだけで長い裾を踏んで転んでしまいそうになる。

（ほ、ほんとに似合ってるの、かな）

お世辞だろうとどこかで疑いつつも、真に受けてしまいたい気持ちもある。自分では見えないから、想像することしかできないのだから。

「まあ、私の見立てですから当然です。女性の身に着けるものを選ぶのは得意なんですよ」

冗談のように言って笑ってみせるシオンだが、カディールが肩をすくめてどこか肯定しているのを見ると、こういったことが以前もあったのだろうと思わせる。

アジアに手伝ってもらって着た新しい服は、今まで来ていた白ではなく、さまざまな色で染めた糸で織られている。薄い布を何枚か羽織り、それらを腰の紐で留めているのだが、その色の重なりが趣

味のいい独特な色合いを生み出していた。足首までの長い裾、ゆつたりとした袖、貝や陶器の首飾り……どれをとってもユティアが身に着けたことのないものばかりだ。

無造作に伸ばされたままだった髪の毛も、アジアと神殿の大衆浴場に入れられ、毛先を整え、オイルなどで艶を出し、右肩で軽く結って、陶器の花のかんざしをつけた。

くすんだ色の髪の毛は、美しい艶のある黒髪に変わっていた。

「なかなか帰ってこねーと思ったら、こんなに買い込んだのか」

「だってこんな生成りの服では失礼だよ。女性は着飾って悪いときなど一瞬たりともないからね」

「勝手に言ってる」

こういった話題に関して、カディールはシオンに特に敵わないようだった。

「ほんとにかわいいよ。この服もきつと喜んでるしっ」

アジアはこういった服を作って売る店の娘だという。シオンが頼んで手伝いに来てもらったらしいのだが、ユティアから見るとアジアのほうが間違いなく可愛い雰囲気で、そんな少女に褒めてもらうのはお世辞だとしても気恥ずかしかった。

「つまらない服ばかり着ているから飾ってあげたいだなんて、ユティアもいいお兄さんがいてうらやましいよ。あたしが作った服、そうやって着てもらえるとすっごくうれしいんだっ」

「でも、わたしよりシオンのほうが似合いそう……」

ぼつりと思ったことを正直に言ったら、カディールが大爆笑し、アジアは絶句した。一人、当の本人であるシオンだけは涼しい顔を崩さなかった。けれど、本人を含めて誰一人として反論はしなかった。

彼らの反応を見ると、この想像もあながち外れていないような気がして、少し落ち込んでしまう。ユティアも人並み程度には着飾ってみたいという欲求はあるのだが、女性扱いされることに慣れてない。そもそもそんな欲求を言える立場にすらなかった。

「こいつ実はけっこう女の格好するんだぞ。よくわかったな、ユティア」

「ええ？」

「ユティアのほうがお綺麗ですよ」

「……」

余裕のあるその微笑には、やはり敵わない気がした。彼のほうが理想の姫君にみえてくる。

彼は容姿だけでなく、物腰や雰囲気まで洗練されている。それは貧民街での物乞いや奴隷としての生活しか知らないユティアには真似できないことだった。

「あ、じゃああたし、お店あるからもう戻りますねっ。あとはお兄さんたちに褒めてもらってね」

「ありがとうございます。アシア」

店まで送ると言ってくれたシオンを、アシアは顔を赤くしながらも丁寧な断って部屋を出て行った。すると、外からきやあきやあと叫ぶ別の少女たちの声が聞こえてきたのだが、シオンは聞こえないふりをした。

「気にすんな。こいつが女に騒がれるのはいつものことだ」

カデイルが、呆然と帷のほうを見やるユティアに、フォローにもならない言葉を投げかける。前にかかる銀髪をさらりと手で流したシオンも、苦笑を返すだけで否定はしなかった。

彼と行動をともしないでからずと、知り合う女性たちはシオンに恍惚の眼差しを向け、ユティアに憎悪の眼差しを向けていた、その理由がやっとユティアにもわかった。

「どうぞ、ユティア」

やっぱり恥ずかしくてうつむいてしまったユティアに、シオンは丸くて薄い銀板を渡した。見たこともないものだった。

「これは鏡です。ご自分の姿を確認できますよ」

「かがみ？」

水に映る自分しか見たことのないユティアは、その鏡をおそるお

そる覗き込む。

滑らかで柔らかい黒色の髪に縁取られた、少し日に焼けた少女の顔がそこに映っている。おかしいと思つて目を見開くと、鏡の中にある黒の双眸もゆっくりと開かれた。

「え、ええっ？」

もう一度よく見ると、鏡の中の少女も驚いた表情をした。首をかしげたら、同じようなしぐさをした。

街中で見る、普通の少女となんら変わらない……むしろそれ以上にかわいらしく着飾った自分が、そこに映っている。

（これは、誰？ わたし、なの？）

何度も覗き込んで確認しても、信じられなかった。

「さすがの私でも女性の美しさには敵わないですよ、ユティア」
「さりげなく自慢してるよな」

たしかにそのとおりで聞こえて思わず頷いてしまった。

「ユティアまでそう思われるのですか？」

「あ……ご、ごめんなさい」

だが、心外という表情ですら、シオンは綺麗だった。自慢したくなるのもわかってしまうほどに。

「あんたが謝る必要なんかねーっての。全部ほんとなんだから」

「少なくとも貴方に負けない自信はあるけれどね」

「女装で勝つてもうれしくねえっ！」

二人のやりとりは、聞いているだけで楽しい。

（いつまでも、このままだったら……いいな）

昔のことなどすべて忘れて。

辛いことも悲しいことも。

思い出さなくなればいいのに。

（でも、どうしても比べてしまう）

突然の変化。あのころの惨めな自分と、今の自分。
やっぱりまだ、惨めなのだろうか。

「お、おいっ。どうしたんだよ、ユティア」

「……え」

慌てた表情で、カディールがユティアの顔を覗き込んでいた。

「なんで泣いてるんだよ」

「な、泣いてなんか」

両手を頬にあてたら、たしかに溢れてくる涙を感じた。

空腹でもないのに。

「やっぱりこの服が気に入らねーのか？」

「ち、ちが……っ」

「じゃあなんだよっ」

責められるような口調で問われたが、ユティアにもわからなかった。自分でも気づかなかった涙だ。

ただ首を横に振った。

カディールの大きな手が、乱暴だったけれど涙をぬぐってくれた。
(どうして、こんなに優しくしてくれるんだろう)

他人を気遣う余裕などなかった。ユティアも周りの子供たちも。
そんな世界があったのに……。

ここは、慈愛に満ち溢れている。

三章 時を止めるもの、戻すもの 4

シオンに勧められた屋上は、空がさらに近くて広がった。
どこまでも見える気がする。

「どうですか？ 綺麗でしょう」

飲み物を持ってあとから現れたシオンに、ユティアは何度もうなずいた。

「太陽が沈んでくのは、ずっと怖かったのに……もう、見ても平気」

静かに、音もなく、光が失われていく。そのあとに待つのは、永遠とも思えるような闇だった。

それを見るのが一番怖かった。綺麗なはずの夕陽は、ユティアを闇の中に引きずり込むだけだった。

いつ晴れるとも知れない、永遠のような黒。

けれど朝になってまた、殴られるかもしれないと脅えるのも恐ろしかった。

それが今は、単純に、綺麗な光だと思う。

「どうぞ。今日は天気もよかったので、のどが渴いたでしょう」

シオンは透明な水に少し色のついた飲み物をユティアに渡した。
見たこともないものだったけれど、薄い土器から伝わる冷たさに惹かれてすぐに口をつけてみる。

「……っ！」

驚いて手を滑らせそうになったところを、シオンが器を支えてくれた。

「大丈夫ですか？」

「……こ、こんなに甘いと、思わなくて」

初めての味。けれど、身体に優しく、ほっとする味だ。

「蜂蜜です。あまり好きではありませんでしたか」

「うっん……すごくおいしい。花の蜜に、似てるかな」

春になれば花が咲く。野にあるそれらを摘んで食べても、誰にも怒られなかった。ユティアが知っている甘いものは、そのくらいしかなかった。

一気に飲み干してしまったユティアを見て、シオンは器を受け取った。

「甘いものって元気になるでしょう？」

「……あ」

本当にそうだった。

（どうして、シオンはわたしがほしいものを知ってるんだろう）

それが洞察力や経験なのかもしれない。

彼は、ユティア自身すら気づかないうちに望んでいるものすら、すべてわかっているようだった。

「カディは？」

「大衆浴場に行ってますよ」

そういえば、早く入りたいと昼間に言っていたのを思い出す。

「シオンは入らないの？」

「カディールですか？ それは……うるさそうですね」

のんびりとした口調でシオンはそう言って笑った。

どんなときでもカディールかシオン、どちらかがユティアのそばにいる。彼らと出会ってまだ数日だったが、自分が狙われているであろうことは身にしみて理解できたから、一人にさせないようにしているのだ。

「ご、ごめんなさい……」

そんなことにも気づかず、無神経な質問をした。

彼らのほうがずっと、気の休めるときなどないだろうに。

「ユティア」

呼ばれて見上げたシオンの白皙の顔は、夕焼けで少し赤く見えた。「そんなに謝らないで。なんにも悪いことなどなさってないでしょう」

「でも、さっきだって。服せっかくもらったのに」
なぜか泣いてしまって、カディールに怒鳴られた。二人に満足な

お礼も言えていない。

(うれしかったのに)

似合うとか、かわいいとか。

初めて言ってもらえて。

「嬉しいときもひとは泣いてしまっんですよ」

「……そう、なの？」

ユティアが泣くときは、怖いとき、痛いとき、そして空腹のときだけだった。けれどもいまは、そのどれからも遠ざかっている。

「でも、今度からは笑ってあげてください」

「え？」

「カディールがね、心配しているんです」

心配というよりも怒られている気がしている。

「一度も笑ってくれないから、服でも買ったなら喜んでくれるのではないかと」

「あ……」

「けれど、彼に任せたらろくでもない格好にされてしまいますから、私が代わりに選んできたんです。だからこれ、カディールの提案なんです」

「そう、だっただ……」

だから泣かれて焦ったのかもしれない。

本当はうれしかったのだと伝えたいけれど、もう遅いだろうか。

「だから、ね。笑ってあげてください」

自分がずっと笑っていなかったことなど、ユティアはまったく気づいてなかった。今までの生活で笑顔になれるような出来事は少なかった。

「……うん、そうする」

もう忘れてしまった感情。

(ちゃんと、笑えるかな)

四章 生得権 1

「ここはいろいろなものを売っていますから、なにか欲しいものがあつたら遠慮なく言つてくださいね。贅沢はあまりできませんけれど」

町を歩いて見てみたいというユティアの望みに、カディールとシオンはいやな顔をせずにつき合ってくれた。

「そ、そんな……この服だけでもう、十分、だし」

すでにかなり贅沢をさせてもらっている気がする。新鮮な野菜や果物、それだけでユティアは幸せだ。

「俺には無駄遣いすんなどか言つてたくせによ」

「女性に贈り物をするのは、古今東西、重要なことだからね」

「でも……お金、あるの？」

いつまでも泉のように沸いてくるはずもないことはユティアでもわかる。さすがに心配になって、おもわずユティアは尋ねていた。

少し驚いた表情で二人はユティアを振り返った。

失礼な質問をしてしまったのだと、そのときやっと気づいた。

「あ、ごめんなさいっ」

「いいんですよ」

「ていうか、あんたが気にすることじゃねーし」

ユティアの頭をなげるカディール。子ども扱いされているが、実際子供だったから何も言えなかった。

奴隷になる前は、母とやっていたように藁を編んでそれを売る生活もしていた。母のいたところはそれだけでなんとか食べていけたが、ユティアひとりではほとんど稼ぐことはできなかった。

貧民街にいるようになり、仲間たちといっしょになって、貴族たちから金銭を盗んで、食べ物に換えたこともあった。罪悪感を背負って食べるのは楽しくなかったけれど、それでも空腹よりもましだった。

「大丈夫ですよ、ユティア。カディールはこのとおり礼儀のかけらも知らないんですけど、傭兵なんかをしてお金をかせいでいるんです」

「よう、へい？」

「つまり、要人たちの警護です。礼儀を知らなくとも、腕はありますから」

「いちいち、礼儀知らないとかなうなっ」

彼の反論は、シオンに笑顔で軽く頷かれて終わってしまった。

「じゃあ、ここには長くいるつもりなの？」

「実は、まだわからないんです。王都に行きたいのでその情報集めと、できればカディールには少し資金をかせいでおいてもらいたいですし」

中規模の街で傭兵をして手柄を立てれば紹介状などをもらえて、大都市で仕事を探しやすいのだという。

カイゼの街の大通りはそれなりに多くの人々が往来しているが、人々はどこか疲れた表情をしていた。ユティアがきよきよとあたりを見回していると、野菜を売る市場の小道から中年の男が飛び出してきた。

「おい、ジユラが来るぞっ」

男が叫ぶ。

そのとたん、あたりは騒然となった。

荷台から運んでいた野菜が落ちるのも気にせず走り出す商人たち、道端で座り込んでいた野菜売りもあわてて片付けて奥に隠れてしまった。通りの真ん中で鞆を蹴っていた少年も、母親らしき女性に抱えられて物陰に消えた。

そのただならぬ様子に、ユティアもシオンに促されて同じように通りの中央を開けた。急に静まり返る通りの両脇で、人々は地面に頭をつけてひれ伏していた。見る限り、立っているのはユティアたち三人だけだ。

「……なんなんだこれは」

カディールが呟いたのと、うしろから馬車の近づく音を聞いたのはほぼ同時だった。

振り返ると、町中だというのに速度を落とさない幌つきの馬車が、こちらに向かつてきていた。

それを確認した彼らの視界に、ころころと通りの中央に向かつて転がっていく鞆が映る。それを追いかける幼い少年。母親はひれ伏していて自分の子供には気づいていないようだった。

「……おいっ！ 危ねえぞっ」

カディールが声をかけても少年は鞆を追いかけていた。馬車はますますすぐに、まるで狙っているかのように、速度も落とさず少年に向かっていく。

「馬車っ！ 止まれ、なに見てんだよっ」

「……カディールっ」

シオンの制止の手も届かず、カディールは通りに飛び出していった。

だが、馬車の速度にかなうはずもない。

（ いやだ ）

ユティアは思わず一步下がった。見たくない。

「止まれっ！」

カディールの罵声。

人々が少し、顔をあげた。

「いやああああっ！」

これは母親の叫びだろうか。

けれど、カディールの目の前で、子供は宙を飛んだ。

長身のカディールの目線よりも高く。

どさりと背中から落ちる少年。

だが馬車は、何事もなかったかのようにその場を走り去っていった。

（ ……この子はまだ、しあわせだ ）

カディールがすぐに少年に駆け寄った。

母親が少年を抱いて、泣き崩れた。

見ていた人々が少年のまわりに輪を作った。

（けれど、そうじゃないときもある）

ユティアと仲のよかった少女も昔、馬車に轢かれた。あのころはレクトもいて、目撃者もたくさんいた。御者も馬車を止めて、一度は降りてきたけれど、貧民街の子供だとわかったとたん、謝罪もなくその場を去っていった。誰もがとたんに無関心になった。

「ユティア……大丈夫ですか」

曇った表情になったユティアにすぐに気づいたシオンが声をかける。硬い表情のまま、いちおうは頷いた。

もう昔のことだ。

「……あのこは、大丈夫なの？」

「わかりません」

ユティアが傍らのシオンを見上げると、彼は普段と変わらぬ静かな瞳でカディールを見つめていた。ユティアもそちらに目をやると、カディールが少年を抱きかかえて向かってくるところだった。

「まだ息がある！ 神殿に連れてってやる」

「わかった」

カディールのその行動はあらかじめ予期していたのか、シオンは当然のようにうなずいた。カディールは少年を抱えて先に走り、ユティアたちは母親や数人の知り合いとともに少し遅れてあとを追った。

四章 生得権 2

ユティアたちが到着してすぐ、カディールからその少年は助からなかったことを告げられた。

「ったく！ あの馬車なんだってんだつ。許せねえ」

カディールは優しい。ユティアはそう思う。

仲のよかった少女が目の前で死んでしまったときでさえ、ユティアは悲しかったけれど泣けなかったし憤りを感じなかった。
(だってしょうがなかった)

誰にも振り返ってもらえないし、誰にも助けを求められない。神殿に行けば誰でも怪我を治してもらえるということだって知らなかった。生きていることすら、疎まれていた。

「でも、仕方ないですよ」

母親に付き添っていた男の一人が、落胆した表情でぼつりとつぶやく。あのころのユティアと同じ、諦めるしかないのだと。

「あんたらは……旅人かね」

シオンが軽く頷いた。

「あの馬車はジュラという男のもんだ……逆らわんほうがいい」

「何があつたんですか？」

「もとは領主の私兵だったらしいが、いまじゃ領主のほうがいいなりさ……町中じゃやりたい放題。抗議すれば殺されるだけだしな……」

……

王都に直接訴えようとしたらしいが、その使者にたった男たちは二ヶ月たつても戻ってこないのだという。

「それ以来、関所も閉められちまって、誰も出ることができん」

「……領主の紹介状どころじゃねーな」

「旅人たちは黙って引き返すか、関所を破ろうとして殺されるか……そのどちらかだな」

王都サルナードへは、カイゼの街からでなくても可能だが、遠回

りになる上にここからだとその道にはほとんど町らしき町はない。
逃げ回る過酷な旅を続けてきたから、シオンは少しでもユティアの
移動を少なくさせるためにこの道を選んだ。

「どのような人物なのか、そのジユラというのは」

「いつも黒い布で全身を覆ってるから、誰もその顔はわかんねえ。
だけど、剣を持たしたら抵抗する間もなく殺されるって話だ……」

その言葉を想像して、ユティアは少し顔を逸らした。想像しな
ければよかったと後悔した。

「……あんたも左利きだね」

「だからなんだ？」

カディールの背中の中は、左手で抜けるようになっていた。男は
それを見て、少しだけ眉をひそめたのだ。

「ジユラも左利きだという話だった。だから、つい……左利きの剣
使いなんかを見ると、あまりいい思いはしないんだ。……すまん」

「くだらねえ」

機嫌が悪そうに、カディールは舌打ちした。

そんな態度にも男は気分を害された様子もなく、逆に表情を少し
和らげて口を開いた。

「でも、希望はある。おれらを救ってくれるひとがいて……」

「みなさんっ。ご無事ですかつ？」

説明していた男が急に目を輝かせたちょうどそのとき、一人が部
屋に飛び込んできた。

二十代前半に見える若い青年は、ユティアたちの視線に軽く会釈
しながらも、部屋の奥に走っていった。そこには寝かされたままも
う二度と動かない少年とその母親がいる。

彼らを気遣い、励ましている青年のうしろ姿を、人々は安堵の瞳
で見やっていた。

「あれはなんだ？」

「ああ、トウリード様だよ。領主クイードの息子なんだ」

「なんだって？」

カディールが声を張り上げたが、男は涼しい顔をして首を振った。領主はジュラとともに増税などを敢行しているというのに、その息子はここで歓迎されていたのだ。

「あのひとはおれらの味方してくれてる。これ以上増税にやらんように進言してくださってるし、ジュラの部下たちが暴れたときも駆けつけてくれるしな」

彼の功績は周知らしく、部屋に現れたその姿を見つけた人々は、どこかほっとした表情を浮かべて彼のもとに集まっていった。

「領主の長男は逃げ出しちまって、たまにしかカイゼに戻ってきてないんだがな、ご次男のトゥリード様は本当によくやってくれるよ」そのトゥリードは、母親たちと話をしたあと、こちらにやってきて丁寧に一礼した。中背の痩せた男だったが、よく使いこまれた剣を腰に帯びている。

「貴方があの子を助けようとしてくれたのですね」

「……けっきょく無駄だったけどな」

カディールが悔しさからか、そっけなく答えた。

「いいえ。でも怒ってくださって、感謝しています。私の力不足でこのようなことに……」

「実の父親を止められねえのか？」

カディールの口調に怒気が混ざる。

「お恥ずかしい話ですが、今ではもう父は私よりもジュラの話を聞くようになっていいます……」

惨劇はいつまでも続いていくのだろうか。

（このひとたちも、生きているのが辛いのかな……）

当然誰にでもあるはずの権利が、他人によって奪われていく。

ひっそりと隠れて住むことすら許されない街。

「どうして、ジュラという男は、この街でこれほど権力を得ることができたのでしょうか？」

シオンの当然といえば当然の質問に、だがトゥザードは曖昧な表情をして首を横に振った。

「何か父の弱みを握っていて、脅されているのだろうとか」
それでもトウザードは何かを成そうとしているのか、諦めの眼差
しではなかった。

四章 生得権 3

昼間は暗い表情を見せていた街も、深夜を過ぎると一変する。異なる顔。

人気のなかった一角は、急に賑やかになっていた。路上には酒を売るカウンターが並び、薄着の女たちがカディールに好奇の視線と甘い言葉を送る。

常にシオンのそばにいるせいであまり注目されることはないが、カディールも女性受けのよい風貌をしていた。シオンのような至高の芸術的美貌とは違う、精悍で野性的な面立ちは、人目を惹きつけるには十分な魅力にあふれている。

だが、甘く艶美な声の誘いにも、カディールはまったく揺らがなかった。完全に無視を決め込んで、目的地へのみ向かう。

この遊里に、王都から遠回りをして来たばかりの旅人がいるらしいという噂を手に入れたのはシオンだ。

（だったらあいつが来ればよかったんだ）

彼のほうがこういう場所には慣れているだろう。偏見だが、女性たちへの常日頃の扱いを見ているとそう思ってしまう。

（この情報だつて神殿の女から聞いたに決まってる）

あの笑顔ひとつで、シオンが手に入らない情報はほとんどないのではないかと思えるほどだ。

だが、その旅人というのにカディール自身興味があるのも事実だった。このあたりをうろろろしていて、たまにカイゼにも現れるらしいが、特に何をするでもなくまたどこかへ消えてしまふらしい。

教えられた簡素な看板には、土器の杯が彫られている。通りに突き出たカウンターに、一人の男が寄りかかって杯を傾けていた。

「薄暗い夜だねえ」

三十歳手前に見えるその男は、カディールを見つけても特に警戒するでもなく、のんびりとそう声をかけてきた。

満月ではないが月も見えて、雲も少なく星が輝いている。物理的に暗い夜ではなかった。

カウンターに小銅貨を一枚置いた。カウンターの中の女が、杯を
用意する。

「どうせなら僕が持ってきた酒を試してみる？ カストウル王国からの交易のワインだよ。珍しいだろ？」

「やだあ、あれは銅貨一枚ぼっきりで出したくないわあ」

自慢げに言う男に、甘い声で媚びる女。それはカディールがどうしてもなじむことのできない世界だ。

金はないと断わろうとしたとき、男は銀貨を差し出した。珍しいワインとはいっても一杯に払う金額ではない。カディールが目を瞠ると、男は気にするなというように片目をつぶってみせた。

「あら。今日は気前がいいのね」

女はあっさりと機嫌を直し、カディールの小銅貨と男の小銀貨を懐にしまって、秘蔵のワインを杯に注いだ。

そのあとすぐに女は二つのワイン壺を抱えて、その場から姿を消した。

（人払いのための銀貨、か）

男はカディールが現れることをあらかじめ知っていたようだ。だが、それに言及せず、とりあえず珍しいというその酒を一口飲んでみる。

「強いよ、それ」

たしかに、高いだけのことはあるのか、通常出回っているものよりもかなり強いワインだった。だが、この程度で酔えるような身体ではない。

そのまま一気に飲み干してしまうと、カディールは杯を置いて男のほうに向き直った。

彼は、すでに空になっていた自分の杯を手でもてあそびながら、邪気のなさそうな笑みを返す。

「さすがだねえ。左利きの英雄さんは」

「なんだそれは」

「あれ？ 知らないの？ 男の子を助けようとしたのでしょ。すでにずいぶん有名になっているよ」

その表情からは、事実なのか冗談なのか判別できなかった。

「信じていない顔をしているね。でも、あのジユラに逆らおうとする住人は誰もいなかったから、この街で君は珍しい存在なんだよ」

男は杯を空中でぴんつとはじいた。それは回転してカデイルの使った杯の上に綺麗に重なった。割れることもなく、音も静かに。

「ジユラがカイゼの街を仕切るようになって、たしかに治安は悪化したかもしれない。けれど、領主クイードだったころも何もしていなかったのだから、たいして変わらないんだよ本当はね」

「何でも知ってる口ぶりだな」

何も聞かずとも、彼はぺらぺらとカデイルに話していく。簡単ではあるが、どれを真実とすればよいのか……。

「ええ、僕もあの館で働いていたから」

あっさりと、そう告げられた。驚く余裕もなく、彼は話を続ける。

「たくさん奴隷たちが毎日殴られていた……。それを、ジユラは彼らを奴隷ではなくて、普通に雇うようにしたんだよ。だから、住人たちにあれほど嫌われているジユラに、多くの仲間がいるんだ」

ユティアの昔の知り合いだと言っていたレクトを思い出す。

奴隷として働いていたけれど、逃げたと言っていた。もし、逃げたのではなくジユラに組しているのだとしたら……。

「お前も、奴隷だったのか？」

「……さあ？ どうだろうね」

視線を逸らして、彼は空を見上げた。

月が雲に隠れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7023x/>

【夢幻の大陸詩】 Blue Bird & Black Bloom? ~ 勇の章

2011年11月20日03時21分発行